

日本文学全集
9

夏目漱石
(二)

それから・行人・ころ

河出書房

夏目漱石 (二)



カラー版日本文学全集 9

1967©

昭和四十二年五月二十日 初版印刷
昭和四十二年五月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

著者 夏目漱石

発行者 河出朋久

印刷者 草刈親雄

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

夏目漱石(二)

それから

.....五

行人

.....二三

ころ

.....二七七

注釈
解説

色刷挿画
それから

行人

ころ

紅野敏郎 三六四

佐伯彰一 三六五

高山辰雄

高山又造

加山又造

夏
目
漱
石
(二)

そ
れ
か
ら*

誰かあわただしく門前を馳けて行く足音がした時、代助の頭の中には、大きな組下駄が空から、ぶら下っていた。けれども、その組下駄は、足音の遠のくにしたがって、すうと頭から抜け出して消えてしまった。そうして眼が覚めた。

枕元を見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちてゐる。代助は、昨夜床の中でたしかにこの花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護謄を天井裏から投げつけたほどに響いた。夜がふけて、あたりが静かなせいかとも思ったが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋の骨に正しくあたる血の音を確かめながら眠りに就いた。

ぼんやりして、しばらく、赤ん坊の頭ほどの大きな花の色を見つめていた彼は、急に思ひ出したように、寝ながら胸の上に手を当てて、また心臓の鼓動を候し始めた。寝ながら胸の脈を聴いてみるのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ちついて確かに打つてゐた。彼は胸に手を当てたまま、この鼓動の下に、温かい紅の血潮のゆるく流れるさまを想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌で抑えているんだと考えた。それから、この掌に應える、時計の針に似た響きは、自分を死に誘う警鐘のようなものであると考えた。この警鐘を聞くことなしに生きていたら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかったなら、いかに自分は気楽だろう。いかに自分は絶対に生を味わい得るだろう。けれども——代助は覺えずぞつとした。彼は血潮によつて打たる掛念のない、静かな心臓を想像するに堪えぬほどに、生きたがる男である。彼は時々寝

ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、ここを鉄槌で一つ撲されたならと思うことがある。彼は健全に生きていながら、この生きているという大丈夫な事実を、ほとんど奇蹟のごとき僥倖とのみ自覚し出すことさえある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬っている絵があった。彼はすぐほかの頁へ眼を移した。そこには学校騒動が大きな活字で出てゐる。代助は、しばらく、それを読んでゐたが、やがて、だるそうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。それから煙草を一本吹かしながら、五寸ばかり布団を摺り出して、畳の上の椿を取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて来た。口と口髭と鼻の大部分が全く隠れた。煙りは椿の舞と燕にからまつて漂うほど濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がつて風呂場へ行った。

そこで丁寧に歯を磨いた。彼は歯並びの好いのを常に嬉しく思つてゐる。肌を脱いで奇麗に胸と背を摩擦した。彼の皮膚にはこまやかな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取つたように、肩をうごかしたり、腕を上げたりするたびに、局所の脂肪が薄く漲つて見える。彼はそれにも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白いほど自由になる。髭も髪同様に細くかつ初々しく、口の上を品よく徹うてゐる。代助はそのふつくした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映していた。まるで女がお白粉を付ける時の手付きと一般であつた。実際彼は必要があれば、お白粉さえ付けかねぬほどに、肉体に誇りをおく人である。彼のもつとも嫌うのは羅漢のような骨格と相好で、鏡に向うたんに、あんな顔に生まれなくつて、まあよかったと思うくらいである。その代り人からお洒落と言われても、何の苦痛も感じ得ない。それほど彼は旧時代の日本を乗り越えている。

約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら焼麴麴に牛酪を付けていると、門野という書生が座敷から新聞を疊んで持つて来

た。四つ折りにしたのを座布団のわきへ置きながら、

「先生、大変なことが始まりましたな」と仰山^{ようざん}な声で話しかけた。この書生は代助を捕まえては、先生先生と敬語を使う。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、えへへへ、だって先生と、すぐ先生にしてしまうので、やむを得ずその儘にして置いたのが、いつか習慣になって、今では、この男に限って、平氣に先生として通している。實際書生が代助のような主人を呼ぶには、先生以外に別段適当な名称がないということを、書生を置いて見て、代助も始めて悟ったのである。

「学校騒動のことじゃないか」と代助は落ちついた顔をして麵麴を食っていた。

「だって痛快じゃありませんか」

「校長排斥がですか」

「ええ、とうてい辞職もんでしよう」と嬉しがっている。

「校長が辞職でもすれば、君は何か儲かることでもあるんですか」

「冗談言っちゃいけません。そう損得ずくて、痛快がられやしません」代助はやっぱり麵麴を食っていた。

「君、あれは本当に校長にくらしくって排斥するのか、ほかに損得問題があつて排斥するの知ってますか」と言いながら鉄瓶の湯を紅茶茶碗の中へ注した。

「知りませんな。何ですか、先生はご存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、そんなもんですか」と門野はやや真面目な顔をした。代助はそれぎり黙ってしまった。門野はこれより以上通じない男である。

これより以上は、いくら行つても、へえそんなもんですかなで押し通して澄ましている。こちらの言うことが応えるのだから、応えないのだからまるで要領を得ない。代助は、そこが漠然として、刺激が要らなくて好いと思つて書生に使っているのである。その代り、学校へも行

かず、勉強もせず、一日ごろごろしている。君、ちっと、外国語でも研究しちゃどうだなどと言うことがある。すると門野はいつでも、そうでしょうかと、とか、そんなもんでしょうかと、とか答えるだけである。決してしましようということは口にしない。またこう、怠惰ものでは、そう判然した答えが出来ないのである。代助の方でも、門野を教育しに生まれて来た訳でもないから、好加減にして放っておく。幸い頭と違つて、身体の方はよく動くので、代助はそこを大いに重宝がっている。代助ばかりではない、従来からいる婆さん門野のお蔭でこの頃は大変助かるようになった。その原因で婆さんと門野とはさぶる仲が好い。主人の留守などには、よく二人で話をする。

「先生は一体何をする気なんだろうね。小母さん」

「あのくらいになつていらつしやれば、何でも出来ますよ。心配するものはない」

「心配はせんがね。何かしたら好きそうなもんだと思うんだが」

「まあ奥様でもお賈いになつてから、ゆつくり、お役でもお探しなさるお積りなんでしょうよ」

「いい積りだなあ。僕も、あんな風^{ふう}に一日本^{いちほん}を読んだり、音楽を聞きに行つたりして暮^くしていたいな」

「お前さんが？」

「本は読まんでも好いがね。ああいう具合に遊んでいたいね」

「それはみんな、前世からの約束だから仕方がない」

「そんなものかな」

まずこういう調子である。門野が代助の所へ引き移る二週間前には、この若い独身の主人と、この食客との間に下のような会話があらた。

「君はどっかの学校へ行つてゐるんですか」

「もとは行きましたがな。今は廃めちまいました」

「もと、どこへ行つたんです」

「どこって方々行きました。かしこども厭きっぱいもんだから」

「じき厭になるんですか」

「まあ、そうですね」

「で、大して勉強する考えもないんですか」

「ええ、ちょっと有りませんな。それに近頃家の都合が、あんまり好きないもんですから」

「家の婆さんは、あなたのおっ母さんを知ってるんだってね」

「ええ、もと、じき近所にいたもんですから」

「おっ母さんはやっぱり……」

「やっぱりつまらない内職をしているんですが、どうも近頃は不景気で、あんまり好きないようです」

「好くないようですって、君、いっしょにいるんじゃないですか」

「いっしょにいることはいますが、つい面倒だから聞いたこともありません。何でもよくこぼしてるようです」

「兄さんは」

「兄は郵便局の方へ出ています」

「家はそれだけですか」

「まだ弟がいます。これは銀行の——まあ小使いに少し毛の生えたぐらいな所なんですよ」

「すると遊んでるのは、君ばかりじゃないか」

「まあ、そんなもんですな」

「それで、家にいるときは、何をしているんです」

「まあ、大抵寝ていますな。でなければ散歩でもしますかな」

「ほかのものが、みんな稼いでるのに、君ばかり寝ているのは苦痛じゃないですか」

「いえ、そうでもありませんな」

「家庭がよっぽど円満なんですか」

「別段喧嘩もしませんかな、妙なもんで」

「だって、おっ母さんや兄さんからいったら、一日も早く君に独立して貰いたいでしょうがね」

「そうかも知れませんか」

「君はよっぽど気楽な性分と見える。それが本当のところなんですか」

「ええ、別に嘘をつく料簡もありませんな」

「じゃ全くの呑気屋なんだね」

「ええ、まあ呑気屋っていうもんでしょうか」

「兄さんは何歳になるんです」

「こうつと、とって六になりますか」

「すると、もう細君でも貰わなくちゃならないでしょう。兄さんの細君が出来ても、やっぱり今のようになっている積りですか」

「その時になって見なくっちゃ、自分でも見当が付きませんが、何しろ、どうかなるだろうと思ってます」

「そのほかに親類はないんですか」

「叔母が一人ありますがな。こいつは今、浜で運漕業をやってます」

「叔母さんが？」

「叔母がやってる訳でもないんですが、まあ叔父ですな」

「そこへでも頼んで使って貰っちゃ、どうです。運漕業ならだいぶ人が要るでしょう」

「根が怠惰なもんですからな。おおかた断わるだろうと思ってるんです」

「そう自任していちゃ困る。実は君のおっ母さんが、家の婆さんに頼んで、君を僕の宅へ置いてくれまいかという相談があるんですよ」

「ええ、何だかそんなことを言っていました」

「君自身は、一体どういう気なんです」

「ええ、なるべく怠けないようにして……」

「家へ来る方が好いんですか」

「まあ、そうですね」

「しかし寝て散歩するだけじゃ困る」

「そりゃ大丈夫です。身体の方は達者ですから。風呂でも何でも汲み

ます」

「風呂は水道があるから汲まないでもいい」「じゃ、掃除でもしましょう」

門野はこういう条件で代助の書生になったのである。

代助はやがて食事を済まして、烟草を吹かし出した。今まで茶簞笥の陰に、ぼつねんと膝を抱えて柱に倚り懸っていた門野は、もう好い時分だと思つて、また主人に質問を掛けた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

この間から代助の癖を知っているので、幾分か茶化した調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危しくなりそうですね。どうも先生見たように身体を気にしちゃ、——しまいいには本當の病氣に取付かれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野はただへええと言ったぎり、代助の光沢の好い顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めている。代助はこんな場合になるといつまでもこの青年を氣の毒に思う。代助から見ると、この青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰まっているとしか考えられないのである。話をすると、平民の通る大通りを半町ぐらいいか付いて来ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷子になってしまう。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系にいたつてはなおさら粗末である。あたかも荒縄で組み立てられたるかの感がある。代助はこの青年の生活状態を観察して、彼は必竟何のために呼吸をあえてして存在するかを怪しむことさえある。それでいて彼は平氣にのらくらしている。しかもこののらくらをもつて、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、なかなか得意に振舞いたがる。そのうえ頑強一点張りの肉体を笠に着て、かえつて主人の神経的な局所へ肉薄して来る。自分の神経は、自分に特有なる細微な思索力と、鋭敏な感性に對して払う租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響

の苦痛である。天罰的に貴族となった報に受ける不文の刑罰である。これらの犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分になった。否、ある時はこれらの犠牲そのものに、人生の意義をまともに認める場合さえある。門野にはそんなことはまるで分らない。

「門野さん、郵便は来ていなかったかね」

「郵便ですか。こうつと。来ていました。端書と封書が。机の上に置きました。持つて来ますか」

「いや、僕があつちへ行つてもいい」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つてしまった。そうして端書と郵便を持つて来た。端書は、今日二時東京着、ただちに表面へ投宿、取りあえず御報、明日午前会いたし、と薄墨の走り書の簡書きわまるもので、表に裏神保町の宿屋の名と平岡常次郎という差出人の姓名が、裏と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来たのか、昨日着いたんだな」と独り言のように言いながら、封書の方を取り上げると、これは親爺の手蹟である。二三日前歸つて来た。急ぐ用事でもないが、色々話があるから、この手紙が着いたら来てくれと書いて、あとには京都の花がまだ早かったの、急行列車が一杯で窮屈だったなどという閑文字が数行列ねてある。代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方見較べていた。

「君、電話を掛けてくれませんか。家へ」

「はあ、自宅へ。何て掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合わせる人があるから上がれないって。明日か明後日きつと伺いますからって」

「はあ、どなたに」

「親爺が旅行から歸つて来て、話があるからちよつと来いって言うんだが、——何親爺を呼び出さないでもいいから、誰にでもそう言つてくれ給え」

「はい」

門野は無雜作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通過して書斎

へ帰った。見ると、奇麗に掃除が出来ている。落椿もどこかへ掃き出されてしまった。代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行って、上に載せた重い写真帖を取り上げて、立ちながら、金の留金をはずして、一枚二枚と繰り始めたが、中頃まで来てびたりと手を留めた。そこには二十歳ぐらいの女の半身がある。代助は眼を俯せて癡と女の顔を見つめていた。

二

着物でも着換えて、こつちから平岡の宿を訪ねようかと思っているところへ、折よく先方からやつて来た。車をがらがらと門前まで乗りつけて、ここだここだと梶棒を下さした声はたしかに三年前分れた時そっくりである。玄関で、取次の婆さんを捕まえて、宿へ墓口を忘れて来たから、ちょっと二十銭貸してくれと言ったところなどは、どうしても学校時代の平岡を思い出さずにはいられない。代助は玄関まで馳け出して行って、手をとらぬばかりに旧友を座敷へ上げた。

「どうした。まあ緩くりするが好い」

「おや、椅子だね」と言いながら平岡は安楽椅子へ、どさりと身体を投げ掛けた。十五貫目以上もあろうというわが肉に、三文の価値を置いていないような扱い方に見えた。それから椅子の背に坊主頭を靠たして、ちょっと部屋の中を見廻しながら、

「なかなか、好い家だね。思ったより好い」と賞めた。代助は黙って巻簾入れの蓋を開けた。

「それから、以後どうだい」

「どうの、こうのって、——まあ色々話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分ったが、近頃じゃちつとも寄こさないもんだから」

「いやどこもかしこもご無沙汰で」と平岡は突然眼鏡をはずして、背広の胸から皺だらけの手帛を出して、眼をばちばちさせながら拭き始めた。学校時代からの近眼である。代助は癡とその様子を眺めてい

た。

「僕より君はどうだい」と言いながら、細い蔓を耳の後ろへ絡みつけて、両手で持って行った。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番好いな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺め出したが、不意に語調をかえて、

「やあ、桜がある。今ようやく咲きかけたところだね。よほど氣候が違う」と言った。話の具合が何だか故のようにしんみりしない。代助も少し気の抜けた風に、

「向うはだいぶ暖かいだろう」とついでで同然の挨拶をした。すると、今度はむしろ法外に熱した具合で、

「うん、だいぶ暖かい」と力の這入った返事があった。あたかも自己の存在を急に意識して、はっと思った調子である。代助はまた平岡の顔を眺めた。平岡は巻簾に火を点けた。その時婆さんがようやく急須に茶を淹れて持って出た。今しがた鉄瓶に水を注してしまったので、煮立てるのに暇がいて、つい遅くなって済みませんと言訳しながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんの喋舌つてる間、紫檀の盆を見て黙っていた。婆さんは相手にされないの、独りで愛想笑いをして座敷を出た。

「ありや何だい」

「婆さんさ。雇ったんだ。飯を食わなくっちゃならないから」

「お世辞が好いね」

代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下の方へ彎げて蔑むように笑った。

「今までこんな所へ奉公したことがないんだから仕方がない」

「君の家から誰か連れて来れば好いのに。大勢いるだろう」

「みんな若いものばかりでね」と代助は真面目に答えた。平岡はこの時始めて声を出して笑った。

「若けりゃなお結構じゃないか」

「とにかく家の奴は好くないよ」

「あの婆さんのほかに誰かいのかい」

「書生が一人いる」

門野はいつの間にか帰って、台所の方で婆さんと話をしていた。

「それぎりかい」

「それぎりだ。何故」

「細君はまだ貰わないのかい」

代助は心持ち赤い顔をしたが、すぐ尋常一般の極めて平凡な調子に言った。

「妻を貰ったら、君のところへ通知ぐらいする筈じゃないか。それよりか君の」と言いかけて、びたりとやめた。

代助と平岡とは中学時代からの知り合いで、殊に学校を卒業した後、一年間というものは、ほとんど兄弟のように親しく往来した。その時分は互いに凡てを打ち明けて、互いに力になり合うようなことを言うのが、互いに娯樂のもともなるものであった。この娯樂が變じて実行となったことも少なくないので、彼らは双互のために口にした凡ての言葉には、娯樂どころか、常に一種の犠牲を含んでいると確信していた。そうしてその犠牲を即座に払えば、娯樂の性質が、忽然苦痛に變ずるものであるという陳腐な事実さえ気がつかずにいた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤めている銀行の、京阪地方のある支店づめになった。代助は、出立の当時、新夫婦を新橋の停車場に送って、愉快そうに、じき帰って来給えと平岡の手を握った。平岡は、仕方がない、当分辛抱するさと打ちやるように言ったが、その眼鏡の裏には得意の色が羨しく動いた。それを見た時、代助は急にこの友達を憎らしく思った。家へ帰って、一日部屋へ這入ったなり考え込んでいた。嫂を連れて音楽会へ行くはずのところを断わって、大いに嫂に氣を揉ましたくらいである。

平岡からは断えず音便があった。安着の端書、向うで世帯を持った

報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己将来の希望、色々あった。手紙の来るたびに、代助はいつも丁寧な返事を出した。不思議なことに、代助が返事を書くときは、いつでも一種の不安に襲われる。たまには我慢するのが厭になって、途中で返事をやめてしまうことがある。ただ平岡の方から、自分の過去の行為に対して、幾分か感謝の意を表して来る場合に限って、安々と筆が動いて、比較的ならかな返事が書けた。

そのうちだんだん手紙のやり取りが疎遠になって、月に二へんが、一べんになり、一べんがまた二月、三月に跨がるように間を置いて来ると、今度は手紙を書かない方が、かえって不安になって、何の意味もないのに、ただこの感じを駆逐するために封筒の糊を湿すことがあった。それが半年ばかり続くうちに、代助の頭もだんだん組織が變つて来るように感ぜられて来た。この変化に伴って、平岡へは手紙を書いても書かなくても、まるで苦痛を覚えないようになってしまった。現に代助が一戸を構えて以来、約一年余というものは、この春年賀状の交換のとき、ついでをもつて、今の住所を知らしただけである。

それでも、ある事情があつて、平岡の事はまるで忘れる訳には行かなかった。時々思い出す。そうして今頃はどうして暮しているだろうと、色々想像して見ることもある。しかしただ思い出すだけで、別段問ひ合わせたり聞き合わせたりするほどに、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日まで過ぎて来たところへ、二週間前に突然平岡からの書信が届いたのである。その手紙には近々当地を引き上げて、御地へまかり越す積りである。ただし本店からの命令で、榮転の意味を含んだ他動的の進退と思つてくれは困る。少し考えがあつて、急に職業替えをする氣になったから、着京の上はなにぶんよろしく頼むとあつた。このなにぶんよろしく頼むの頼むは本當の意味の頼むか、または単に辞令上の頼むか不明だけれども、平岡の一身上に急劇な変化のあつたのは争うべからざる事実である。代助はその時はつと思つた。

それで、逢うや否やこの変動の一部始終を聞こうと待もうけていたのだが、不幸にして話がそれて容易にそこへ戻つて来ない。折を見てこつちから持ちかけると、まあ緩く話すとか何とか言つて、なかなか罅を開けない。代助は仕方なしに、しまいに、

「久し振りだから、そこいらで飯でも食おう」と言い出した。平岡は、それでも、まだ、いづれ緩くを繰り返したがるのを、無理に引張つて、近所の西洋料理へ上がった。

兩人はそこだいたいぶ飲んだ。飲むことと食うことは昔の通りだねと言つたのが始まりで、硬い舌がだんだん弛んで来た。代助は面白そうに、二三日前自分の觀に行つた、ニコライの復活祭の話をした。お祭りが夜の十二時を合図に、世の中の寝鎮まる頃を見はからつて始まる。参詣人が長い廊下を廻つて本堂へ歸つて来ると、いつの間にか幾千本の蠟燭が一度に点いている。法衣を着た坊主が行列して向うを通るときに、黒い影が、無地の壁へ非常に大きく映る。——平岡は頰杖を突いて、眼鏡の奥の二重瞼を赤くしながら聞いていた。代助はそれから夜の二時頃広い御成街道を通つて、深夜の鉄軌が、暗い中を真直に渡つてゐる上を、たつた一人上野の森まで来て、そうして電燈に照らされた花の中に還入つた。

「人気がない夜桜は好いもんだよ」と言つた。平岡は黙つて盃を干したが、ちよつと気の毒そうに口元を動かして、

「好いだらう、僕はまだ見たことがないが。——しかし、そんな真似が出来る間はまだ気楽なんだよ。世の中へ出ると、なかなかそれどころじゃない」と暗に相手の無経験を上から見たようなことを言つた。代助にはその調子よりもその返事の内容が不合理に感ぜられた。彼は生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験の方が、人生において有意義なものと考えている。そこでこんな答えをした。

「僕は所謂処世上の経験ほど愚なものはないと思つてゐる。苦痛があるだけじゃないか」

平岡は酔つた眼を心持ち大きくした。

「だいたい考えが違つて来たようだね。——けれどもその苦痛が後から薬になるんだつて、もとは君の持説じゃなかったか」

「そりゃ不見識な青年が、流俗の諺に降参して、好加減な事を言つていた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」

「だつて、君だつて、もう大抵世の中へ出なかつちやなるまい。その時それじゃ困るよ」

「世の中へは昔から出ているさ。ことに君と分れてから、大變世の中が広くなつたような気がする。ただ君の出ている世の中とは種類が違ふだけだ」

「そんなことを言つて威張つたつて、今に降参するだけだよ」

「無論食うに困るようになれば、いつでも降参するさ。しかし今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか。印度人が外套を着て、冬の来た時の用心をと同じことだもの」

平岡の眉の間に、ちよつと不快の色が閃めいた。赤い眼を据えてぶかぶか烟草を吹かしている。代助は、ちと言ひ過ぎたと思つて、少し調子を穏やかにした。——

「僕の知つたものに、まるで音楽の解らないものがある。学校の教師をして、一軒じゃ飯が食えないもんだから、三軒も四軒も懸けもちをやつてゐるが、そりや気の毒なもんで、下説みをするのと、教場へ出て器械的に口を動かしているよりほかに全く暇がない。たまの日曜などは骨休めとか号して一日ぐうぐう寝ている。だからどこに音楽会があるうと、どんな名人が外国から来ようと聞きに行く機会がない。つまり楽という一種の美しい世界にはまるで足を踏み込まないで死んでしまわなかつちやならない。僕から言わせると、これはど憐れな無経験はないと思う。麵麴に關係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麴を離れ水を離れた貧乏な経験をしなかつちや人間の甲斐はない。君は僕をまだ坊つちやんだと考えてるらしいが、僕の住んでゐる貧乏な世界では、君よりずっと年長者の積りだ」

平岡は卷簾の灰を、皿の上にはたきながら、沈んだ暗い調子で、

「うん、いつまでもそういう世界に住んでいられれば結構さ」と言つた。その重い言葉の足が、富に対する一種の呪詛を引き摺っているように聴えた。

兩人は酔つて、戸外へ出た。酒の勢いで変な議論をしたものだから、肝心の一身上の話はまだ少しも發展せずにいる。「少し歩かないか」と代助が誘つた。平岡も口ほど忙しくはないと見えて、生返事をしながら、いっしょに歩を運んで来た。通りを曲つて横町へ出て、なるべく、話のし好い閑かな場所を選んで行くうちに、いつか緒口がついて、思うあたりへ談柄が落ちた。

平岡の言うところによると、赴任の当時彼は事務見習いのため、地方の経済状況取調べのため、だいぶ忙しく働いて見た。出来得るならば、学理的に実地の応用を研究しようと思つたくらいであつたが、地位がそれほど高くないので、やむを得ず、自分の計画は計画として未來の試験用に頭の中に入れておいた。もつとも始めのうちは色々支店長に建築したこともあるが、支店長は冷然として、いつも取り合なかつた。むずかしい理屈などを持ち出すとはなはだご機嫌が悪い。青二才に何が分るものかと言うような風をする。その癖自分は實際何も分っていないらしい。平岡から見ると、その相手にしないところが、相手にするに足らないからではなくて、むしろ相手にするのが怖いからのように思われた。そこに平岡の癪はあつた。衝突しかけたことも一度や二度ではない。

けれども、時日を経過するに従つて、肝癪がいつとなく薄らいできて、次第に自分の頭が、周囲の空氣と融和するようになった。またなされるべくは、融和するように力めた。それにつれて、支店長の自分に対する態度もだんだん變つて来た。時々は向うから相談をかけることさえある。すると学校を出たての平岡でないから、先方に解らない、かつ都合のわるいことはなるべく言わないようにしておく。

「むやみにお世辭を使つたり、胡麻を搦るのは違ひうが」と平岡はわざわざ斷わつた。代助は真面目な顔をして、「そりゃ無論そうだろう」

と答えた。

支店長は平岡の未來の事について、色々心配してくれた。近いうちに本店に帰る番にあたつてゐるから、その時はいっしょに來給えなどと冗談半分に約束までした。その頃は事務にも慣れるし、信用も厚くなるし、實際も殖えるし、勉強をする暇が自然となくなつて、また勉強がえつて実務の妨げをするように感ぜられて来た。

支店長が、自分に万事を打ち明けるごとく、自分は自分の部下の関という男を信任して、色々相談相手にしておつた。ところがこの男がある芸妓と関係つて、いつの間にか會計に穴を明けた。それが曝露したので、本人は無論解雇しなければならぬが、ある事情からして、放つておくと、支店長にまで多少の傾きが及んで來さうだつたから、そこで自分が責を引いて辭職を申し出た。

平岡の語るところは、ざつとこうであるが、代助には彼が支店長から因果を含められて、所決を促されたようにも聞えた。それは平岡の話の末に「会社員なんてものは、上になればなるほど旨いことが出来るものですね。実は関なんて、あればかりの金を使いこんで、すぐ免職になるのは氣の毒なくらいなものさ」という句があつたのから推したのである。

「じゃ支店長は一番旨いことをしている訳だね」と代助が聞いた。

「或いはそんなものかも知れない」と平岡は言葉濁してしまつた。

「それでその男の使いこんだ金はどうした」

「千に足らない金だつたから、僕が出しておいた」

「よく有つたね。君もだいぶ旨いことをしたと見える」

平岡は苦い顔をして、じろりと代助を見た。

「旨いことをしたと仮定しても、皆使つてしまつてゐる。生活にさへ足りないくらいだ。その金は借りたんだよ」

「そうか」と代助は落ちつきはらつて受けた。代助はどんな時でも平生の調子を失わない男である。そうしてその調子には低く明らかなうちに一種のまるみが出ている。